

うん かん うん じょ

雲卷雲舒—現代中国美術展・紙

会期	2020年3月20日(金・祝)～6月28日(日)
開館時間	平日／10:00～17:00、土曜・休前日／9:30～19:00、日曜・休日／9:30～18:00 最終入館は閉館時間の30分前まで
休館日	毎週月曜日 [ただし、「房総里山芸術祭いちはらアート×ミックス2020」開催期間中は開館]
料金	一般1,000(800)円／大高生・65歳以上の方800(600)円。 ()内は20名以上の団体料金。中学生以下・障害者手帳をお持ちの方とその介添者(1名)は無料。 「房総里山芸術祭いちはらアート×ミックス2020」作品鑑賞パスポートのご提示で入館料無料(「房総里山芸術祭いちはらアート×ミックス2020」開催期間中)。
主催	市原湖畔美術館[指定管理者:(株)アートフロントギャラリー]
後援	中華人民共和国駐日本国大使館、中国人民対外友好協会
協力	瀚和文化 HUBART、いちはらアート×ミックス実行委員会



展覧会について

この度、市原湖畔美術館では、鄭妍^{ツェン・イェン}氏を氏をゲストキュレーターに迎え、7名の中国現代アーティストによる「紙」をテーマにした展覧会を開催いたします。

「紙」は、古代中国の4大発明（羅針盤、火薬、紙、印刷）のひとつです。「紙」の発明は、文献、書籍、科学や文化などの交流を促し、世界の文明の発展に貢献しました。日本は中国文明の影響のもとに成り立ち、距離が近いだけでなく、文化的にも密接につながっています。書や絵画など紙を通じた文化はあらゆる側面において、中国からの影響をうけています。

本展では、「雲卷雲舒^{うんかんうんじょ}」（雲が太陽に絡まり、大空に広がる様子）をメインテーマに、現代の紙の表現の地平を示します。留まるも去るも自由自在な雲のように、視野を広げ、伸び伸びとした心で自身と社会に向き合うアーティストの作品をご堪能ください。

参加作家（アルファベット順）：

ツァイ・グオチャン リー・ホンポー リン・イェン リュウ・ジャンファ ワン・ユヤン ウー・ケンアン ウー・ウェイ
蔡國強、李洪波、林延、劉建華、王郁洋、鄔建安、伍偉

「雲卷雲舒^{うんかんうんじょ}」とは：

「雲が太陽に巻き付いたり伸びたりする、空模様」のことを表す言葉です。中国に古くからある「菜根譚^{さいこんたん}」という本の一節「寵辱不驚、閑看庭前花開花落。去留無意、漫隨天外雲卷雲舒。」で、「世間の賞賛や非難に惑わされるな。咲いては散りゆく庭先の花のようなものだから。地位の変化にも心を乱されるな。空に浮かぶ雲は、風まかせに形を変えるようなものだから。」と訳されます。「紙」を雲にたとえて、アーティストの創作は、紙を巻き、紙を広げるように展開します。

本展の見どころ

「紙を通じて、物事に対する認識を問う」

「紙」は芸術において画像を映したり、絵画の下地として使われたりする一方で、空間を仕切る建築部材のようにも使われることがあります。本展参加作家が表現する「紙」は、これらの物理的な「紙」としての存在ではなく、作家それぞれが世界の多様な文化における強制や衝突への思考、人類が抱える環境問題などの社会問題に向き合う姿勢、固有の意識に対して抱くべき疑問と意識であります。本展では、様々な形で「紙」を表現し、人々に物事に対する認識を問いかけます。

「気鋭の中国人アーティストの作品を日本で初展示」

ニューヨークを拠点に活躍する林延の宣紙（中国の書道や水墨画で使われる紙）を使った迷路のような作品や、ウィーンやベルリンのアーティストインレジデンスに参加している伍偉の紙を獣の毛皮に擬態させた作品など、中国国内外で活躍する気鋭の中国人アーティストの作品を日本で初展示します。



展示作品参考画像



1



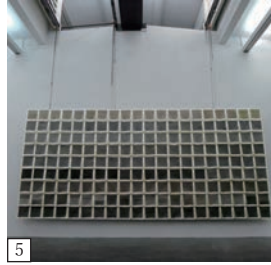
2



3



4



5



6



7

1. 蔡國強(ツァイ・グオチャン)《私はE.T.天神と会うためのプロジェクト: Project for Extraterrestrials No.4》福岡アジア美術館所蔵 / 2. 李洪波(リー・ホンポー)《無始無終》 / 3. 林延(リン・イエエン)《天璣》 / 4. 劉建華(リュウ・ジャンファ)《白紙》 / 5. 王郁洋(ワン・ユウヤン)《語る -- 紙の束》 / 6. 鄭建安(ウー・ケンアン)《五百筆・半天云》 / 7. 伍偉(ウー・ウェイ)《ステルス》



参加作家略歴・
展示作品について



photo by Lin Yi © Cai Studio

蔡 國強 (ツァイ・グオチャン)

1957年福建泉州生まれ、ニューヨーク在住。形式にとらわれない自由な表現方法を求めて、火薬に着目。その偶発性や創造と破壊の両義性に関心をもち、1986年から約9年間住んだ日本では、各地での大規模な火薬を使った野外イベント『外星人のためのプロジェクト』を展開。本展では、和紙の上で火薬を爆発させ、その痕跡を残す「火薬画」という手法によるドローイングの中から、1990年に福岡市で制作した《私はE.T. 天神と会うためのプロジェクト : Project For Extraterrestrials No.4》を展示する。



李 洪波 (リー・ホンポー)

1974年吉林省生まれ、北京在住。中国の「紙のひょうたん」という子どものころに遊ぶおもちゃで使われている古い技法(膨大な紙を重ねて糊付けした伸縮自由自在なもの)で作品を作り、優雅で張りのある紙作品を作り出す。中国の伝統の伝統を受けながら、現代アートにおける表現を発表し続ける。本展では、その古い技法を使って作られた、有形か無形、始まりも終わりもない巨大な作品《無始無終》を展示する。※日本初展示



© FOU GALLERY

林 延 (リン・イェン)

1961年北京生まれ、ニューヨーク在住。幼いころから家族の芸術精神を目にし、独自の芸術感覚を養う。中国歴代の書道絵画用の伝統的な紙を使用し、シンプルな白黒の2色で絵画彫刻を制作し、ニューヨークの主要な美術のメディアから注目を集める。本展では、2017年から様々な都市にある美術館において発表している、北斗七星と名づけられたプロジェクトの一つとなる《天璣III-門天》を展示。宣紙(中国の書道や水墨画で使われる紙)で作られた迷路で、自然と宇宙と人との関係についての考えを喚起する。※日本初展示



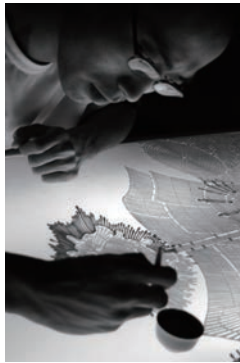
劉 建華 (リュウ・ジャンファ)

1962年江西省を生まれ、上海在住。焼き物で有名な景德镇で陶磁器の仕事を始め、一貫して陶磁器を使用した作品を発表。中国現代アーティストの中で、最も実験的な作品を作るアーティストのひとり。本展では、紙は記録を書くための媒体だけではなく、アートという存在であることを表現した作品《白紙》を展示する。



王 郁洋 (ワン・ユーヤン)

1979年ハルビン生まれ、北京在住。新しいメディアを使って、創作しているにも関わらず、科学技術の新規性を強調しない作風で知られる。「時代遅れ」の技術、「破壊的」の美学、材料の浪費がもたらすアート性に関心を持ち、ユーモアとフィクションと奇抜さで人生を探索しながら体験と認知の関係を描く。本展では、「紙」は独立して存在するものとして自己認識を紙に与えた作品《語る一紙の束》を展示。手づくりの紙の生産過程を記録した映像を手作りの紙に印刷したその作品を通じて、観念と方法の転換を語る。※日本初展示



鄒 建安 (ウー・ケンアン)

1980年北京生まれ、同在住。強い創造性と豊かな思想性があり、新たな表現方法を模索しながら独自のスタイルで中国とヨーロッパの古代神話や歴史を学ぶ。伝統的な文様や書など中国の伝統文化をベースにエネルギー溢れる現代アートへと昇華させた作品が評価され、ニューヨークのメトロポリタン美術館やヴェネチアビエンナーレ中国パビリオン等、国内外で作品を多数発表。本展では、2016年に越後妻有で多くの人々に筆を入れてもらい制作した作品《五百筆シリーズ》を通じて、個人と集団の関係性を考えるきっかけを与えます。



伍 偉 (ウー・ウェイ)

1981年河南省生まれ、北京在住。文明、野生、神話をテーマに、素材と空間における新しい感覚を探究する。作品の多くは、思わず触りたくなる気持ちを誘発する。本展では、一見すると獣の毛皮を紙で表現した作品《ステルス》を通じて、主観的な判断に疑問を持たせ、純粋な視覚体験と象徴的な手法で精神性の存在を隠喩する。※日本初展示

ゲストキュレーター



鄭 妍 (ツェン・イェン)

イギリスのハフハンブトン芸術学院で学び、現在は万営芸術空間のアートディレクターを務める。これまで中国において今日美術館や光州ビエンナーレなど数多くの美術館やプロジェクトなどでキュレーターを務めたほか、グッゲンハイム美術館(米国)やテート(英国)など海外においても展覧会のコーディネーターなどに携わる。2013年には国際交流基金が主催する「アジアキュレーター交流プログラム」に参加。

関連イベントについて

展覧会関連イベントを多数予定しております。詳細が決まり次第、美術館ホームページにてお知らせいたします。

<http://lsm-ichihara.jp>

SNS について

当館の最新情報はFacebookやTwitter、Instagramでも発信されています。ぜひご覧ください。

Facebook：市原湖畔美術館

Twitter：@LSM_ICHIHARA

Instagram：lsm_ichihara



アクセス

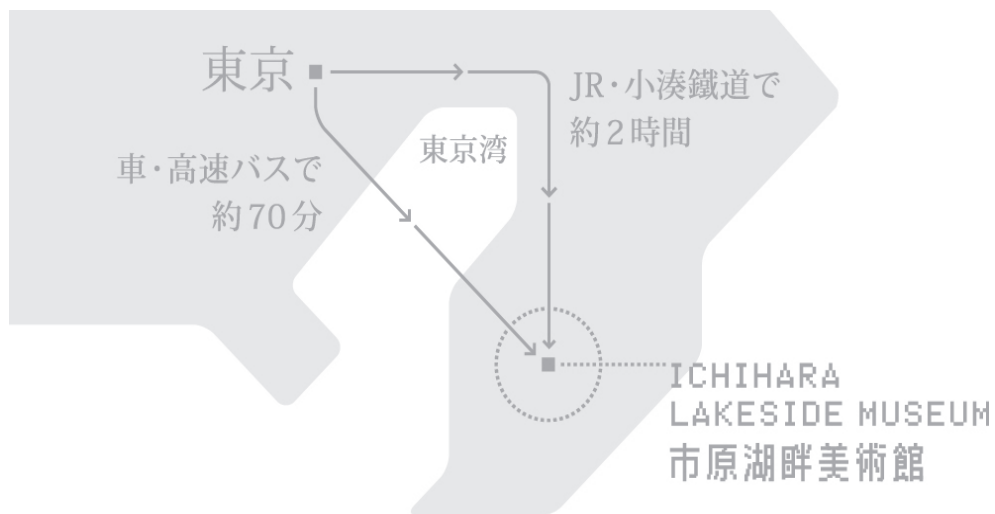
所在地：〒290-0554 千葉県市原市不入 75-1

鉄道で：JR 内房線五井駅乗り換え 小湊鉄道「高滝」駅より徒歩 20 分 / レンタサイクル 10 分 /
タクシー 5 分

お車で：圏央道「市原鶴舞 IC」より約 5 分

高速バスで：東京駅・羽田空港・横浜駅より約 1 時間

(市原鶴舞バスターミナルよりタクシー 約 5 分)



広報についてのお問い合わせ

市原湖畔美術館 富樫・本山

tel : 0436-98-1525 fax : 0436-98-1521

press@lsm-ichihara.jp www.lsm-ichihara.jp

